

中間貯蔵 あと20年

2045年への歩み

災害の爪痕、今も残る

ジャーナリストスクール2班の7人は、大熊町と双葉町の中間貯蔵施設を訪れた。管理する会社の広報担当者の案内で、大熊町側の施設を見学したほか、町内の中間貯蔵事業情報センターも訪れた。原発事故によって発生した放射性物質を含んだ土などを保管しているが、あと20年以内に県外で最終処分することが定められている。一方、除去土壌の利用や最終処分について理解が十分に進んでいないという。

中間貯蔵施設は国道6号の東側、南北8キロ東西2キロに広がる。案内



除去土壌が貯蔵された場所で放射線量を測っている様子

・環境安全事業株式会社
の千葉広明さんによると、これまで約1400万立方メートルを運び込み約1200万立方メートルを貯蔵したという。除去土壌の上にさらに土を乗せ小さな山のようにになったところがあちこちにある。長袖着、マスク、手袋、ヘルメットをつけ、線量計を手にして説明を受けた。昔は田畑や工業団地が広がっていたが、今は木や草が茂り、昔の面影は分らない。敷地内には、県水産種苗研究所の跡がある。海に面し、ヒラメなどの養殖をしていたが、津波の被害を受けた当時のままで屋根が半分なくなった



除去土壌の上で実際に測定した放射線量

若者が情報発信を

一人でも多くの理解必要

「県外の人で除去土壌の再利用をしてもいいと思う人は20%ぐらいなんです」。千葉さんは私たちに説明した。中間貯蔵施設に初めて除去土壌が運び込まれたのは2015年で、今年で10年となった。20年後の2045年までには県外で最終処分されること



津波によって崩壊した県水産種苗研究所の跡



高台から見た東京電力福島第一原発

の道路には誰のものか分からない錆びた車両が置かれており、建物内部にはテーブルや椅子、ガラス片が散乱している。中間貯蔵施設の前に訪れた中間貯蔵事業情報センターは3月15日に開所し、情報発信や展示を行っている。情報センターなど、東京電力福島第一原発の地元の大熊町や双葉町に新しい施設や道路が次々できている。震災から14年が過ぎて様子が変わったところがある一方、変わっていないところもあると感じた。



はどうだったか。
A：住宅や商店があった。近くには病院や駅があり町の中心だった。帰還困難区域だったが除染をして人が住めるようになった。

Q：地元の人のつながりは。
A：インタビュー映像を撮影したり、昔の話や昔の写真を発信している。地元の方々の思いをこれからも大事にしていきたい。

中間貯蔵・環境安全事業株式会社
中間貯蔵管理センター
地域連携・広報課
課長代理
千葉 広明さんに聞く

Q：放射性物質に関係する仕事をするのに怖くなかったか。
A：これまで勉強して危なくないと知っていたので、怖くなかった。
Q：情報センターでは何人が働いていてどのような仕事をしているか。
A：26人のスタッフが施設の案内、映像によるPRをしている。
Q：情報センターのある場所は以前

「若い人は、ここを訪

私たちが作りました



鈴木 新大(喜多方一小5年)
阿部 ころ (中村二小5年)
野村 美貴(小名浜東小6年)
新谷 匠央(平三中2年)
新谷 奏乃(平三中2年)
中村 莉菜子(西会津中3年)
横山 結子(磐城高1年)

「県外の人で除去土壌の再利用をしてもいいと思う人は20%ぐらいなんです」。千葉さんは私たちに説明した。中間貯蔵施設に初めて除去土壌が運び込まれたのは2015年で、今年で10年となった。20年後の2045年までには県外で最終処分されること